

会話の含意の棚上げと阻止現象

—— if any, if anything, if ever, if not, not...until ——*

田 中 廣 明

Suspendability and Blocking Phenomena of Conversational Implicature:
If Any, If Anything, If Ever, If Not, and Not...Until.

Hiroaki TANAKA

ABSTRACT

This paper discusses mainly the lexical items which suspend conversational implicature, such as *if any*, *if anything*, *if ever* and *if not*, and secondarily the one which blocks the emergence of conversational implicature like *not...until*. *If any*, etc. are representative of suspension of conversational implicature in a general sense, but this is in fact not the case, as is illustrated by the doubt whether the suspended meaning is really conversational in the Gricean sense. According to Horn (1972) and many others, a lower item on a semantic and pragmatic scale allows for the possibility of something “stronger” holding. This possibility, however, is allowable only when the suspension words are added to the quantified predicates. It is not until *if any*, etc. are uttered that suspension is implicated, whether conversationally or not. Second and last, *not...until* sometimes allows and sometimes blocks the occurrence of conversational implicature, i.e., the sense of actualization (Declerck’s terminology). The sense of actualization is implied strongly at some time and weakly at another time. The degree of the implied actualization is determined by the hearer’s corollary, which is not explainable only by the Gricean and neo-Gricean “Quantity Maxims.”

1. はじめに

本稿では、会話の含意の棚上げ表現 (if any, if anything, if ever, if not) を考察の中心とし、補足的に会話の含意の阻止現象を持つ not...until を扱う。語彙項目の考察は、副題の順番で行うが、以下の点を最終的な論点として扱う。

- (1) a. if any (if anything), if ever, if not は会話の含意を棚上げにしているとされているが、棚上げにしているのは果たして会話の含意であるのかどうか。
- b. if any (if anything), if ever, if not そのものが、修飾する語句・命題に果たす役割は何か。その生起条件、基本的意味はどのようなものか。
- c. not...until は「実現性の含意」を持つとされているが、それが阻止される場合はどんな場合か。その場合の含意は、会話的なのか、言語慣習的なのか。含意を含意と感じるのは、誰で、どのような場合か。

2. if any と if anything

ある英和辞典の初版に次のような例があった。

- (2) He had little, *if anything*, money with him.

筆者はこの文が非文であることに気づかずに、if any との違いをインフォーマントに求めたのだが、意味の違い以前に、(2) は if any でなければならないと指摘された (この辞典の第2版では He has little, if anything, to say. に訂正されている)。そこで本章では、次の点を扱う。(i) 2.1節：if any と if anything の統語的な違い。(ii) 2.2節：if any と if anything の意味とその違い。(iii) 2.3節：if any は会話の含意の棚上げ表現か。

2.1. if any と if anything の統語的な違い

if any も if anything も副詞句なので文頭、文中、文尾に生じる。ただし、if anything は文頭、文中の一部では「むしろ、どちらかと言えば」の意味で、if any と比較できない。本節では、文中での違いに焦点を置く。端的に言って、if any と if anything は(3a)と(3b)の違いにつきる。

- (3) a. He had little, *if any*, money with him.
- b. *He had little, *if anything*, money with him.

(3b) は、頻度はまれであるが(4a)、さらに marginal であるが(4b)とすればよく

なる。

(4) a. He had little, *if anything*, with him.

b. ?He had little money, *if anything*, with him.

(4a)が(3a)と同義になるには、お金のことがすでに話題になっていなければならぬ。(4b)は(3a)と同義にはならず、「何かあるとしても」すなわち「何かが行われるとしても(そのためのお金はほとんど持っていなかった)」という意味で、*anything*が*money*の意味を表さない。

(3a)(3b)の違いは、*any*が限定詞、*anything*が代名詞であるためである。それ故*if any*の方は文脈上、あるいは文内で*any*のあとに名詞が省略されたと感じられるため、(3a)や次の(5)でもOKになる。ところが、*if anything*は*anything*だけで意味解釈が終わってしまっており、(4b)のようにすればよいが(3b)は非文となる。何を修飾しているかと言えば、*any*は前置あるいは後続する、復元可能な名詞、*if anything*は文全体ということになる。つまり、(3a)(3b)は*any money*はOKだが、*anything money*が不可であるのと同じになる。

(5) He had little money, *if any*, with him.

次に、*if any*が非文法的である例をあげる。

(6) a. She should, *if anything*, be promoted to manager.

b. *She should, *if any*, be promoted to manager.

(7) a. She had little, *if anything*, in the way of money.

b. *She had little, *if any*, in the way of money.

*if any*は上述したように、復元可能な名詞がなければならない。(6b)(7b)ともそれが見あたらないため非文である。それぞれ(8a)(8b)にするとOKとなる。

(8) a. She, *if any*, deserves promotion to manager.

b. She had buckets and buckets of water, but little *if any* in the way of drinking water.

(8a)は*promotion*、(8b)は*water*が隠されていることになる。では、(7b)は*in the way of money*の*money*が復元可能な名詞ではないのであろうか。答えは(8b)のような文脈がないとnoである。*if any*は*little*+[...]という名詞句を修飾するため、復元可能な名詞は[...] (すぐ上のnode上)から復元されなければならない((8a)は*promotion*がすぐ上のnode上にある)。(8b)の*water*も*in the way of drinking water*からではない。さらに、次の(9a)が非文であることも(7b)が非文である原因である。

(9) a. *Do you have *any* in the way of money?

b. Do you have *anything* in the way of money?

その他の制限として、if anything が修飾する主要部は countable であってはならない。if any は OK となる。

- (10) a. He wore little/*few, *if anything*, in the hot season.
 b. He wore litte/few, *if any*, in the hot season.

2.2. if any と if anything の意味的特徴

2.2.1. if any

if any には、(11)のように「もし何かあれば」と、(12)のように「たとえあっても」の意味がある。その違いは、if any が修飾する名詞句の数量が限定されているかいないかである。

- (11) a. Correct errors, *if any*.
 b. After 20 years, the kids (*if any*) will probably have left home.
 c. You would also be taking on whatever unknown problems the house has (*if any*).
- (12) a. There are thousands of boys and girls leaving school at 16 with few, *if any*, qualifications and certainly no hope of A-levels or university. (*The Daily Telegraph*, 12/23/1991)
 b. There's not much—*if any* at all—difference between the Byzantine pronunciation and the Modern Greek pronunciation.
 c. Gallup asked: “Which, *if any*, of the following presents would you most like to receive at Christmas?” (*ibid.*, 12/27/1991)

(11a)(12a)とも、if any を補うと、if there are any errors, if there are any qualifications と同じであるから、表面上、違いは限定性に求める以外にない。では、なぜ違いが生じるのだろうか。(12)の場合、数量が限定されているため、any はその数量内で尺度の下限に言及し「少しでも」の意味となる。if は限られた数量内での条件を表し、かつ一番低い数量が述べられる。if any は「もしその数量内であるとするとき一番低い数量で」と、最も成立しそうにない条件（譲歩的な意味）を述べるため「たとえあるにしても（多分ない）」の意味を表す (cf. 小西 (編) 1989: 159; Sahlin 1979: 103)。(12b)で at all が共起するのは、低い可能性をさらに強めるためである。

これに対し、(11)は数量が限定されておらず、any はその数量のどこを指してもいい。そのため条件の成立に関しては neutral となり、「もしいくらかあれば」という意味で、例えば(11c)の場合、話し手は「もし(どんな問題でもまだ分かっていない問題が)あればの話だが」と疑念を差し挟んでも、その可能性が低

いとまでは言っていない。

if any は、修飾する名詞句の数量に関して、それがゼロの可能性もあることを述べる表現である。結論から言うと、(i)名詞句が数量・程度を含意すること、(ii)その名詞句が下限(ゼロ)に言及できることが生起条件となる。(12a, b)のような数量詞としては、few, little, not many, not much, not all (後述)などがある。例えば few if any は few and possibly not any と言い換えられる(Horn 1972: 71)。(12b)は、「違いがたとえあるとしても全然ないかもしれない」の意味を表す(cf. 太田1980: 382-383)。数量詞以外で典型的には、(12c)のように Wh 疑問文がある。Wh 疑問文とは、「何か(誰か)が(を) ...している」ことを前提として尋ねる疑問文である。if any は「ひょっとしてないかもしれない」ことを述べているため、質問者がその前提に自ら強く疑念を挟む言い方となる。

単なる名詞句を修飾する表現もある。

- (13) a. Gen [i.e., General] Powell's presidential ambitions, *if any*, are not clear, although he is a master at working the political angle on any issue. (*Daily Telegraph*, 01/25/1991)
- b. The Health Department says if humans ate meat contaminated with clenbuterol residue the main effects, *if any*, would be on the heart. (*ibid.*, 10/23 /1991)

(13a, b)の名詞句は、単にその存在の有無を if any が述べているのではなく、その数量がゼロの可能性もあることを示している。これは、ambitions, effects がその数量にゼロから大までを持つ gradable な名詞であるためである。

(i)については、数量ではなく、存在の有無を問う表現がある。その場合の名詞句には存在前提がない。

- (14) a. You have to include the person's salary, his office space (*if any*), his truck, etc.
- b. There should have been questions about the number of cigarettes smoked daily; whether smokers are refused marital rights and forcibly confined to separate rooms such as lavatories (*if any*);... (*ibid.*, 04/28/1991)

(14a)は未来指示、(14b)は一般的な非叙実文である。(14a)を過去形にした(15a)では、話し手は彼が office を持っているかどうか知らなくて言っている。(15b)の数量を問う文でも、話し手は実際に利益がどのくらいあったのかは分かっていない。

- (15) a. You included the person's salary, his office space (*if any*), his truck, etc.
 b. The profits, *if any*, went to Mr. Jones, whereas the losses fell upon the bank.

一方、(16a)のように、存在前提が保証されている、(特定の出来事に言及する) 叙実性を持つ文では、*if any* でその存在に話し手自ら疑念を差し挟むのは不自然になる。ただし、非叙実的な解釈も可能なため、?にしている。「再試を受けることになってる学生から、まだ願いがでてない。だから、その学生たちは、いても、落ちたことになるな」などの文脈が考えられる。(16b)のように未来形なら、特定的な名詞でも、試験に落ちる学生たちが存在するかどうかはまだ分からないのでOKである。ちなみに(16c)のように、量的な意識のない個体としての student を *if any* とともに単数形で用いるのは不自然となる。(14a)の space と比較されたい。

- (16) a. ?The students, *if any*, failed/didn't fail the exam.
 b. The students, *if any*, will fail the exam.
 c. ?The student, *if any*, failed the exam.

(ii) について、(17)の many/most *if any* は many/ most が上限を指すので不自然。「たとえいるにしても多く (ほとんど) が...」をとるのは不自然だが、別の意味で「もしいるとすると多く (ほとんど) の学生が...」すなわち「多くいるか全くいないかで、少数ということはない」ならOKとなる。

- (17) ?Many/?Most *if any* students like John. (Ladusaw 1979:153)

2.2.2. *if anything*

if anything は *if any* のように名詞句が限定されずに、*if anything happens* (at all), *if anything were the case*, *if we were to do anything* などと補うことができる。*anything* は、出来事が生じる際の下限に (*any* と同様) 言及しており、「(そもそも) 何か (少しでも) 出来事が起こるとしても」という意味を表す。その際の主節は「(その最低限の事態でも) ...が生じる」ということになり、「...という事態だけは絶対に当てはまる」と主節の出来事を強調することができる。

- (18) a. *If anything*, it was Emily who tore the drapes.
 b. It will be the Republicans who raise taxes, *if anything*.

(18a)は「何か起こったにしても、カーテンを引き裂いたりしたのは(ベンジャなくて) エミリーがやったことです。」という意味。(18b)は「(この間の選挙の

結果) 税金を上げるというようなことが何かあるにしても、それは、共和党的な作業で、私たちじゃないのです。」という意味を表す。if anything が最低限の出来事に言及するところから、主節は「少なくとも...である」という効果がある。(6a)も筆者のインフォーマントによれば、「(私は彼女を senior manager ぐらいに上げるべきだと思うのだが)、少なくとも(最低限)通常の manager には上げるべきだ」の意味になる。

この意味が前の文脈と比較されると、「前の文脈と比べて、何かあっても、これだけは最低限生じる(言える)」というつながりから、主に文頭で、「むしろ、どちらかと言えば」と対比的な意味が生じている。この意味は、文頭だけではなく、文中でも現れる(19b)。ただし、文中では、前の文脈とのつながりが希薄な分だけ、曖昧である。

(19) a. I wouldn't say John is lazy. In fact, *if anything*, he contributed as much to the project as any of the rest of us.

b. He [i.e., Mr. Fell] accused Prime Minister of "political double talk." ... Most OMPs agreed that Mr. Fell's attack had, *if anything*, rallied support to the Prime Minister.

(London-Lund: A06)

2.2.3. if any と if anything

では、if any(3a)と if anything(4a,b)の意味の違いはあるのだろうか。(3a)は、ほとんどないお金という限定された範囲内で、「そのお金がたとえあるにしても、たぶんゼロである」ことを述べている。これに対し、(4a, b)、さらにもっと容認度が上がる He had little money with him, *if anything*.でも、if there is anything to say, if he had anything with him と補うことができ、if any と同様に数量の下限に言及している。if anything は「(お金も含めて)彼が持っているものが何かあっても、お金はたぶんゼロであろう」の意味で、「彼に関するあらゆるものの中でのお金の数量」という違いがある。ただし、if any も if anything も、「お金に関していえば、たぶんゼロであろう」と述べていることになり、結果的には同じことになるため、使用上それほど厳密な違いは感じられない。

むしろ、if anything は、if any+[...]のように、復元可能な名詞が見あたらない場合に用いられるとした方がよい。(20)は very little が副詞であるため、if anything 以外使えない。(21a) (21b)は、働きは同じで、「たとえあるにしても、何が(どんな...が)」と「ひょっとして何もないのではないか」という疑念

を差し挟んでいる。

(20) Single parents cost the taxpayer pounds 2 billion a year—remarriage costs the taxpayer very little *if anything*—therefore it is not a problem. (Sunday Telegraph, 03/03/1991)

(21) a. And even if today's findings cause alarm, what, *if anything*, can be done? (*ibid.*, 03/03/1991)

b. Solicitor General Francisco Chavez, ..., said yesterday that the administration had not yet decided what, *if any*, specific charges might be filed against Mrs Marcos,...

(Daily Telegraph, 03/19/1991)

2.3. if any による会話の含意の棚上げ

太田 (1980: 382-383) は、「not many if any は、if any がない not many に生じる会話の含意 some を if any で棚上げにし、ゼロである可能性もあることを示す」としている。ここで言う会話の含意とは、Grice 流の「量の公理」から生じる含意とされているが、では、few や little はどんな会話の含意を持つのであろうか。さらに、(12c) (21) の Wh 疑問文、(13) (14) の数量的な程度を表す名詞句に、Grice 流の会話の含意が生じているのであろうか。

few, little などは、会話の含意が生じているとは言い難く、単にそれ自体が持つ意味 (否定的に見た数量) が、Wh 疑問文では、「何か (誰か、いくらか) が (を) ...するはずだ」という語用論的前提が、数量的な程度を表す名詞では、幾分でも数量があるという語彙的な意味が、それぞれ棚上げの対象になっている。確かに、if any, if anything が棚上げ表現であることは疑問の余地はない。棚上げという意味は、その数量 (程度) や存在に疑念を差し挟むということである。そうすると、疑念を差し挟むことができる対象も否定的な方向に傾いていた方が棚上げがしやすい。if any, if anything の場合、その対象が、few, little など語彙的なものから、if anything が文頭に来た場合の先行文脈との対照性という語用論的なものまで幅が広い。故に「否定的な傾き」という概念は必要十分条件とまでは言えなくとも、必要条件としての役割は十分に果たしている。

次の not all if any は、Horn (1972: 71) は OK とするが、太田 (1980: 382) は不自然とする。筆者の調査でも、容認度は半分半分であった。太田はその理由を「not all に含まれる some という会話の含意は棚上げできないほど強く」としているが、それだけでは(22b)が OK になる理由が説明できない。

(22) a. ?Not all books, *if any*, were burnt.

b. *Not all* books were burnt, *if* indeed *any* were.

(22a)を不可とする人は、some という含意を many, most と同様、肯定的に、尺度の上限を指すと感じているのであろう。(22b)とすると OKなのは、「実際に少しでも燃えたにしても」と現実の出来事を(話し手の判断の中で)いったん棚上げにし、「すべてが燃えたのではなかった(よかった)」と not all を否定的な側面から見ている。この場合、if any が尺度の下限に言及できるところから、話し手は燃えた本はゼロであってほしかった、と希望的観測を示すことができる。not all を「いくらかある」と肯定的に見るか、「全部ではない」と否定的に見るかは、話し手(聞き手)の持つ背景的知識、文脈から生じる推論過程などによるもので、Grice 流の量の公理だけからでは説明できない。

「否定的な傾き」は、否定的な数量詞、Wh 句ならそれ本来が持っているが、それ以外は、(15)-(17)の制限はあるが、話し手がその語句に付加している概念である。「否定的な傾き」ここでは「その語句の数量がゼロを含む」という文脈があればあるほど、if any と共起しやすいことになる。

(23) a. I was therefore surprised to hear a commentator on the Turkey-Ireland game describing the incident leading to the Turkish penalty remark that the foul, *if any*, would have to be deliberate.
(*ibid.*, 12/16/1991)

b. But once we do, there is simply no way of knowing which of these techniques—*if any*—will do the job.
(Erich Segal, *Prizes*, p.12)

(23a)では、筆者の驚きがファウルの有無に疑問を投げかけている。(23b)は、主人公がリンパ肉腫を患っており、その薬を開発している研究機関が3つしかない。そのどれも成功していないし、政府の認可もうけていないという状況で、政府に働きかけても、どの機関の薬が効くか分からないという文脈である。最初から、these techniques に対して否定的な見解で言っていることになる。

3. *if ever*

if ever は *if any* の時間表現である。「たとえ...が起ころうとも」という意味で、*if any* が *few if any* のつながりが主であるのと同じように、*if ever* は *rarely* [*seldom, not always, not often*] *if ever* が中心である。*rarely* などの持つ会話の含意 *sometimes* を棚上げにし、*if not never* (太田 1980: 398) あるいは、*and possibly not ever* (Horn 1972: 71) と等価であるとされる。「たとえあつ

でも、ほとんど（いつもは、しばしばは）起こらない」と起こるかもしれないという可能性を一時的に棚上げにし、ほとんどゼロであると述べる表現である。few if any と同じく、if ever が修飾するのは、基本的に準否定あるいは否定語である。

(24) a. The object under construction is rarely *if ever* worth completion for itself, nor is some immediate justification for discontinuing the work (...) hard to find. (LOB: F21)

b. As with so many racing ‘offences’, in fact, proof ‘beyond reasonable doubt’ is seldom *if ever* available.

(*Daily Telegraph*, 12/30/1994)

c. But the real comedy is in that kitchen and that office, from which venues the first series hardly, *if ever*, strayed.

(*ibid.*, 03/05/1994)

次の astonishingly に注意。(23a)と同じく、書き手の驚きが if ever を生じさせる契機になっていると思われる。

(25) Nicholas Harnocourt’s new disc of Shumann’s concertos for piano and violin were recorded live at performances in the conductor’s home town of Grz. They make for an obvious and rewarding coupling but one which, astonishingly, has rarely *if ever* been exploited. (*ibid.*, 12/17/1994)

このように、話し手の表現意図という点から見れば、if ever が使われるのは(準)否定をさらに強調するためであるとした方がよい。なぜなら、太田や Horn が説明するような会話の含意は、if ever を省いてみた場合には意識されていないからである。if any も同様であるが、if ever があってはじめて「可能性があったかもしれない」という含意が意識されるのである。(22a)の not all if any が人によっては不自然である理由も、それまでは意識されていなかった some という含意を if any があることで強く意識することになり、いわば拒否反応を示していると考えることができる。

if any は数量表現であるため、what, which などを修飾するが、if ever は時間表現であるため修飾するのは when となる。

(26) When, *if ever*, will the German industrial machine roar again? This is the question taxing Germans as they set out on a election year with their economy still in deep recession.

(*Sunday Telegraph*, 01/16/1994)

この場合も、what[which] if any と同様、when の持つ「いつか...するはずだ」という語用論的前提に疑念を差し挟んでいることになる。そのため、(26)では、後の文脈で「ドイツの経済はまだ落ち込んでいる」ことが示され、「ドイツの工業機械が再びうなりを上げる日は、来ても可能性が少ない」ことが述べられている。

if any 同様、if ever も (準) 否定語、when 以外を修飾することができる。if any は名詞句の程度・存在に疑念を挟んでいたが、if ever は主節が生じる時に疑念を差し挟むことになる。

(27) a. His life has changed beyond recognition and at the age of 30 he has had to face the fact that it may be years before he works again, *if ever*, and that he may never have children.

(*Daily Telegraph*, 11/20/1994)

b. The records he has set will not be broken for a long time, *if ever*, but should someone get close to doing so in 20 years' time, I would not be surprised to see Peter reaching for his boots again.

(*ibid.*, 01/07/1994)

(27a)は、if ever があることで「再び働くことがあるとしても、それには何年もかかる...」という意味になり、he works again の時間指定に疑念を差し挟んでいる。(27b)も「記録が破られることがあっても、それは長くかかるだろう」という意味である。この場合も、太田(1980: 398)が説明しているような、if ever を除いた場合の会話の含意を棚上げしているのではなく、if ever があるために、he works again, the records will be broken という命題が確実に起こるとは限らないことが述べられている。つまり、この二つの命題の時間指定が確実であるという含意は、if ever ではじめて意識されるのである。

4. if not...

Horn (1972: 47-66) は、if not...表現が、会話の含意の棚上げ表現であることを述べ、その条件として、p if not q の場合、p と q は同じ尺度上に並ぶこと(ただし、p は q より弱い表現。p < q)、q が p を論理的に含意(entail)する場合としない場合があることをあげている。

(28) a. pretty *if not* beautiful

b. good *if not* excellent

c. warm *if not* hot

d. happy *if not* ecstatic

e. cool *if not* cold

f. like *if not* love

- g. intelligent *if not* brilliant h. dislike *if not* hate
 (29) a. (at least) sick, *if not* dying
 b. moribund/dying *if not* (already) dead
 c. childish *if not* infantile d. adolescent *if not* adult
 e. middle-aged *if not* old
 f. Smoking marijuana is (at least) a misdemeanor *if not* a felony in every state of the union.

(28)が論理的な含意関係(entailment)がある場合、(29)がない場合の表現である。Hornはその区別をそれほど詳しくは述べておらず、この論理的な含意関係という概念は、棚上げ表現の一つの条件とはなっていないようである。この entailment という概念は、Horn (1972) 当時では意味論的な概念と考えられていたが、Horn (1989: 240ff) では、Fauconnier (1975a, 1975b)、Hirschberg (1985) に倣って、尺度の含意 (scalar implicature) そのものが pragmatic な概念としてとらえられており、意味論的な含意関係では説明できないとされている。また、Koenig (1991) も同様に意味論的な尺度を認めずに、語用論的な尺度を認めている。

では、if not による会話の含意の棚上げとはどういうことであろうか。Horn (1972: 48) では、彼のその後の Q-based implicature, R-based implicature を彷彿させるような、次のような説明がある。

- (30) The use of *pretty* to describe someone, then, conversationally implicates the inappropriateness of every stronger element on the same scale, such as *beautiful*. By appending an *if-not* clause, as in *pretty if not beautiful*, we admit the possibility that something stronger (in the same direction) *does* hold, and the implicature, like entailments and presuppositions, can banished to a state of animated suspension.

(Horn 1972: 48)

pretty のような量的尺度 (quantitative scale) を持つ形容詞は、通常の含意として、*pretty* 以上ではないことが述べられる。そこで、*if not beautiful* をつけることによって、*pretty* 以上の含意も成立することが予想されるが、それを *if not* で棚上げ (suspend) しているというのである。ところが、これでは説明としては具合が悪い。ないものをあると見立てて、棚上げにするという説明であるから、この説明では含意の棄却 (cancellelation) もできなくなってしまう。Horn はその後の Q(R)-based implicature を見ても、Levinson (1983, 1987) 同様 neo-Gricean であり、量の公理を基にして、尺度上にある含意を説明しよう

とする。田中 (ms.)、田中 (1996) でもふれたが、含意が生じる状況を説明しないと、何故 *if not* で beautiful という含意があるように見立てられるのかが説明できないことになる。さらに、論理的な含意関係のない(29)の例では、例えば、misdemeanor だからといって felony ではないとする含意が果たして生じているのかも分からない。

結論を先に言ってしまうと、この *if not* 表現はすべて at least 読みを生じさせているものと思われる。q でさえ成り立つかどうか分からないのだから、最低限 p が言えるのは当然だ、つまり q を棚上げにすることで p を述べる効果がさらに上がるという意味である。at least は「少なくとも」という意味であるから、それより上の尺度上の言い方が成り立つことが、言語慣習的（語彙的）に組み込まれており、それを含意と言ってしまうと従来議論になる。

実際に at least が述べられている例もある。

- (31) ...and *at least* two, *if not* more, morning papers will never come amiss to someone who is content to have breakfast in bed.

(LOB: E26)

p の妥当性、すなわち p だと主張するのが正当であることを述べるためには、表現効果として、その文脈で p と関連があり (p と q が同じ尺度上に並んでいる)、Relevance 理論流に言うところ、最も処理労力がかからない p より強い q を引き合いに出しているにすぎない。(32a, b) は p を強調するのに適切な q を持ってきている。

- (32) a. And although I was the same age, *if not* younger than many of them, I felt suddenly old, over-experienced and quite definitely out of the picture.

(LOB: A19)

- b. Hornak and John proved wonderfully complaisant husbands – Patricia's first child by Hornak having the de Bendern name and the two children she bore after a perhaps ill-advised rechauffe with her Cuban Harvard love, himself married to someone else, being Hornaks by name *if not* by genes.

(Daily Telegraph, 1991/10/30)

(32a) は、「若くはないにしても、少なくとも同い年であった。それでも、急に年上に、経験も過度に豊富で、この場にふさわしくないと感じた」と、同い年であることを主張の中心に据えるために、年下ではないことを持ってきている。年下でないことがまた、次の、急に老け込んだように感じたことへの伏線となっているのである。(32b) は「パトリシアがキューバ人のハーバード出の恋人と

よりを戻して、二人の子供を産んだ」、つまり、ホーナックの種ではないことが述べられており、if not by genesはこの文脈で予想がつき、関連のあることである。それ故、「名前だけはホーナックであった」ことを強調できるのである。same ageとyounger、by nameとby genesは、それぞれ確かに「年齢」「出生」という尺度上に並んでいるが、文脈がないと同じ尺度には持って来ることはいできない。次のHorn (1989: 241)からの例では、MussoliniとHitlerが「独裁者」という点で同じ尺度上にあるのは、文脈がなくても我々の背景的知識から自明のことである。これをHornの(30)の説明のように、MussoliniからMussolini的ではないという含意があり、云々ということでは説明しきれない。「Hitlerとまでは行かないが、最低限Mussoliniに匹敵する独裁者性を持つ」ことを強調しているのである。

- (33) The picture of Chiang Kai-Shek that emerges is one that rivals Mussolini, *if not* Hitler, as the very model of a modern major dictator. (from a review of Sterling Seagrave's *The Soong Dynasty*)
(Horn 1989: 241)

if notにat least読みを認めると、p if not qと逆のq if not p(p<q)が不可である理由が説明できる ((28) (29)のpとqを逆にするとすべて不可。その他：*many *if not* some / *most *if not* some / *most *if not* many [much] / *all *if not* some [many, most] / *a majority *if not* a plurality / *often *if not* sometimes / *usually *if not* sometimes [often, always] / *always *if not* sometimes [often, usually] (以上、Horn1972: 70-71))。pが最低限成り立つことを強調するにはどんな方法があるであろうか。それには、pと最も関連のある立言を棚上げ、あるいは否定すればよい。ところが、一般的には、pより弱いとされている立言を棚上げ、否定しても効果がないと考えられる。その理由は、ある事物Xの性質・属性を典型的に述べる方法としては、最もそれにふさわしい言葉(美の尺度ならbeautiful)を選ぶのが一般的だからである。ところが、Hirschberg(1985: 119)は、forty *if not* thirty-nineが通例不可であることを述べた後、(34)を上げ、pが弱い表現であっても、q if not pが可能であると反論している。

- (34) George isn't as old as he looks. I'm not sure how old he really is but I think he's only about forty *if not* thirty-nine.
(Hirschberg 1985: 119)

ところが、(34)は反論になっていない。これは、aboutnessとexactnessの対比である。(34)は「39歳と厳密には言えないにしても、だいたい40歳くらいにし

か見えない」という意味である。p < q において、p if not q と q if not p が双方向的に成り立つとは、上述の理由からも考えられない。この点では、Horn の議論は正しいことになる。

p と q が数字である場合、通例は one if not forty が不可 (Hirschberg 1985: 119) であるように、数字を 1 から 40 まで並んでいるものとして、linear にとらえるのが普通である。その点では、いくら q の方が強い立言であるといえども、あまりにもかけ離れた数字では p の方を強調しようがないということになる。ところが、1 と 40 が対比されている文脈では可能となる。例えば、「彼の頭の程度は、40歳の老化が始まる程度だとは言わないまでも、1歳の赤ん坊程度の出来だ」というような意味などが考えられる。次例は、数字ではないが、1 と all の対比がなされている。

(35) Of majestic build, rubicund and slash-mouthed, he resembled the late General Winfield Scott, who was said to be the most imposing general of his century, *if not* all centuries. (BROWN: E11)

このように、if not 表現に at least 読みを認めると、大部分の現象が説明できるのではないかとした。ここでも、if any、if ever と同様、if not があってはじめて含意の存在が意識される。特に if not は含意といわれているものそのものを言葉に出しているのである。そうすると、それはもはや含意とは言えないのではないかと思われる。

5. not...until の会話の含意

では、会話の含意とは、どういう種類のものであろうか。ここでは、if not に見られるような scalar implicature ではない種類の会話の含意を考察する。主な主眼は、implicature が出ない（阻止されている）場合の文脈である。

新谷(1996)は、Declerck(1995)の dual analysis の紹介をしている。Declerck(1995)については、田中(1995)で論考しており、新谷もふれている「実現性の含意」について考えてみたい。

Declerck の dual analysis は、従来、until が否定対極表現としての性格と、継続の状態としての性格を二重に持つ以外に解決の方法がなかったものを、(実現時の at の意味と only の意味を融合させた) 語彙化という概念でひとまとめにしたことに意義があると思われる。ところが、Declerck は(意味的)語彙化の基本となる、実現性(「(ある時間)になって(やっと)...する」)という意味を、sense of actualization とし、含意(implicature)ではなく、常に生じる

意味、つまり断定 (assertion) と見なしているところに問題がある。この「実現性」は、新谷の以下(36)の例にもあるように、(i)常に生じるものでもなく、(ii)棚上げが可能なため、断定ではなく含意としての意味しかないことになる。

(36) Detective: Do you know what Mary was doing on the night of August 1st?

Landlady: She *didn't* come home *until* 10 that night.

(新谷 1996: 59)

まず、(i)について考察する。Heinämäki (1978) は(37)はaの肯定文でも、bの否定文でも「死が主節の実現を阻止」しており、「彼が死んだ時に主節の出来事が実現された」という意味はないとする。

(37) a. John was a loyal member of his party *until* he died.

b. Bill *didn't* say another word *until* he died.

ところが、Declerck は(37b)のタイプの文を容認しない。not...untilに「...まで...しなかった」という実現に至る期間に重点が置かれた意味があってはならないからである。

(38) a. Nancy remained silent *until* she died.

b. # Nancy *didn't* get married *until* she died.

(38b)は(37b)と同様、「死ぬまで結婚しなかった」という意味が通例である。これは、「死んだときに(死んでから)人は...できない」という我々の日常の知識に基づくものである。まれな読みとして、(37b)は「死の床でやっと言葉を発した、死んでから遺言を残した」、(38b)は「死の床でやっとのことで結婚式を挙げた」のように、until節その時に焦点を当てた意味も可能である。新谷が挙げている(36)のShe *didn't* come home *until* 10 that night.も(37b) (38b)と同じく、意味構造的にはnotの作用域がuntilまで及んでいないと見るべきであろう。(36)の文脈から推測すると、「彼女の不在という継続的な状態」がアリバイの不成立で問題となる文脈であり、「10時まで」は単にその期間を示しているにすぎない。

では、until節の時点での主節の出来事の実現を阻止している要因は何であろうか。

(39) But let's *not* talk about it abstractly *until* we're out of here. Now, first question: the bottles. Shall we take them all with us, or leave one?
(BROWN: L24)

(39)はlinearな解釈として、notがabstractlyまでしか作用域をもてない。not abstractly=concretelyである。それ故、後の文脈で具体的な質問を始めてい

る。

(40) I don't believe they had been making love—that, I imagine, did *not* happen *until* a day or so. (LOB: N13)

(40)は主節の出来事が起こっていないことが前文脈で明言されている。これも一つの阻止現象と呼べるであろう。ここでは、新谷の(36)と同様、否定がひとまとまりの想定として確立している。(39)(40)と「実現性の含意」を持つ(41)(42)を比較されたい。

(41) I *don't* get off work *until* eleven o'clock. That's when my evening commences. (BROWN: L02)

(42) It [i.e., the baby's inner voice] *won't* develop *until* he has words with which to clothe it. (BROWN: B13)

(41)は否定をひとまとまりと考える文脈がない。(42)では「赤ん坊の心の中の声が発達するには、それを表現する言葉が必要である」ことは常識的に推測がつく事柄である。インフォーマント調査によれば、*until*節の時点に焦点を当て、主節が実現することを強調する *at the earliest* が可能なのは(41)(42)であり、(39)(40)では容認度が下がる結果が見られた。ちなみに、逆の意味の *at the latest* は(41)(42)では不可、(39)(40)では容認度が上がる。田中(1995: 277)では、(41)(42)を *strong implicature*、(39)(40)を *weak implicature* と呼んで区別した。ただし、*strong, weak* という言い方は、聞き手が決める種類の事柄である。そもそも、*implicature* 自体は *neutral* であって、*indeterminate* な性質を持つ。それを、聞き手が持つ背景的知識やその場の文脈によって、聞き手自身がどの程度 *implicature* として受け取ることができるのか決定するのである。その意味では、この *not...until* から生じる含意も *conventional* なものではなく *conversational* なものであるとすることができる。

(ii)については、太田(1980: 417)はHorn(1972)から「実現性の含意」は棚上げが可能であることを述べている。次の *if not later, or possibly later, at least* などが棚上げ表現である。

(43) John *won't* wake up *until* {at least} midnight, {if not later/ or possibly later}.

ただし、新谷がDeclerckから引用している以下の(44)では、「実現性」は却下が不可能である(ただし、(44)も文脈によっては可能だとするインフォーマントもいる)。

(44) !John *didn't* wake up *until* nine. In fact, I heard later that he didn't wake up at all.

太田 (1980: 417) はこの含意は、言語慣習的なものか、会話的なものか区別が曖昧であると述べているが、(29)-(32)で述べた条件で、この含意が出ない(弱まる)ということが、この区別を見直さなければならない証拠となるであろう。さらに、私見では、上述したように、含意が生じる場合でもその含意はあくまでも conversational なものと位置づけることができる。ただし、この含意は Grice 流の「量(質)の公理」から生じるものではない。詳しくは、田中(ms.)を参照されたい。implicature について、Grice、neo-Gricean 批判は、Sperber and Wilson(1986)、Carston(1995)を参照されたい。

6. おわりに

if any と if anything は、any が限定詞、anything が代名詞からくる形式的な違いがある。意味的には、数量・程度・命題の下限に言及する働きがある。そのため、叙実的な存在前提のある名詞句を修飾するのは不自然である。語用論的には、言及する対象の数量・程度・存在を棚上げにする表現であり、そのためには、対象そのものが「否定的傾き」を持つとすることができる。「量の公理」から生じる会話の含意の棚上げ表現だとは言えない。

if ever は if not の時間表現ととらえて差し支えない。if ever を除いた場合の会話の含意を棚上げしているのではなく、if ever があるために、主節の命題が確実に起こるとは限らないことが述べられている。つまり、命題の時間指定が確実であるという含意は、if ever ではじめて意識されるのである。

if not は at least 読みを認めると、大部分の現象が説明できるのではないかとした。ここでも、if any、if ever と同様、if not があってはじめて含意の存在が意識される。特に if not は含意といわれているものそのものを言葉に出しているのである。そうすると、それはもはや含意とは言えないと思われる。

最後に、not...until から生じる「実現性の含意」について考察した。ここでは、if any などとは違って、含意を棚上げにするのではなく、阻止してしまう現象があることを見たが、それは現実世界との対照から構造的に決まる場合と、聞き手の系・側 (hearer's corollary) に任されている場合があるとした。

*本稿の第2節 (if any と if anything) で、出典のない用例の容認度の判断は、テキサス農工大中心の言語学の mailing list である Linguist List 上でのインフォーマント調査に負うところが大きい。

参考文献

- Carston, R. (1995) "Quantity Maxims and Generalized Implicature." *Lingua* 96: 213-244.
- Declerck, R. (1995) "The problem of *Not...Until*." *Linguistics* 33: 51-98.
- Fauconnier, G. (1975a) "Polarity and the Scale Principle." *CLS* 11, 189-199.
- . (1975b) "Pragmatic Scales and Logical Structures." *Linguistic Inquiry* 6: 353-375.
- Horn, L. (1972) *On the Semantic Properties of Logical Operators in English*. Ph.D. Thesis. UCLA.
- . (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago University Press.
- Koenig, J-P. (1991) "Scalar Predicates and negation: Punctual Semantics and Interval Interpretations." *CLS 27/2: The Parasession on Negation*: 140-155.
- 小西友七 (編) (1989) 『英語基本形容詞・副詞辞典』 研究社。
- Heimänäki, O. (1978) *Semantics of English Temporal Connectives*. Reproduced by Indiana University Linguistics Club.
- Hirschberg, J. (1985) *A Theory of Scalar Implicature*. Ph.D. Thesis. Univ. of Pennsylvania.
- Ladusaw, W. (1979) *Polarity Sensivity as Inherent Scope Relations*.. Ph.D. Thesis. Univ. of Texas at Austin.
- Levinson, S. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- . (1987) "Minimization and Conversational Inference." *The Pragmatic Perspective*, ed. by M. Papi and J. Verschueren, pp. 61-129. Benjamins.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味—意味論序説』 大修館。
- Sahlin, E. (1979) *SOME and ANY in Spoken and Written English*. Almqvist & Wiksell.
- 新谷多枝 (1996) 「not...until をめぐる新解釈」 『英語教育』 vol. 46, no. 6, pp. 58-59.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Coginition*. Blackwell.
- Tanaka, Hiroaki (田中廣明) (1995) "Implicature of *Not...Until*," *English Linguistics* 12: 272-278.
- 田中廣明 (1996) 「二重否定構文に見る控えめ表現とアイロニー」 *JELS* 13 (Papers from the thirteenth National Conference of The English Linguistic Society of Japan): 161-170.
- Tanaka, Hiroaki (ms.) "*In Other Words* and Conversational Implicature."